1. 夏祭深川不動

一

旧暦４月、初夏――。

坂崎磐音は深川六間堀の金兵衛長屋で蒸し暑い日を過ごしていた。

親友二人を失った明和九年の夏から一年が経とうとしていた。

気温が上がったせいか、鰻割きの仕事は忙しかった。

磐音は毎朝七つ半に、北の橋詰の鰻屋宮戸川にかよってひたすら鰻と格闘していた。

二月ほど前、日当が七十文から百文に値上がりした。そのせいでなんとか暮らしが立っていた。だが、このところ纏まった金が入る仕事はなかった。

この朝、磐音は宮戸川の仕事の帰りに、貧乏御家人の次男坊、品川柳次郎を北割下水の拝領屋敷に尋ねた。拝領屋敷に尋ねた。

拝領屋敷といえば聞こえがいいが、何十年と手入れもされていない壊れかけた屋敷だ。それでも御家人のこと、敷地は二百坪ほどおｎ広さがあった。

この辺りの御家人の屋敷では庭を畑にして季節の野菜などを植え、家計の助けにしていた。品川家でも御多分にもれず、青菜や茄子などを栽培していた。

「坂崎さんか」

畑に水を撒いていた柳次郎が、首に巻いた手拭いで額の汗を拭きながら振り見た。

「何ぞ仕事はありましたか」

「近頃、何もありませんね。口が干し上がってどうしようもない」

「この暑さでは、どこもがうんざりしていますからね」

「暑気払いに一杯といきたいが、あいにく銭の持ちあわせもない。またにしましょうか」

しばらく雑談した磐音は柳次郎に分かれを告げると、深川六間堀の金兵衛長屋に戻った。

九尺二間の長屋には温気が充満していた。

磐音は狭い裏庭の障子を開けると風を入れた。

水甕を除き、米櫃を確かめた。

かさりと底に残っているだけだ。

「なんとかしなければ」

独り言を呟きながら、残った米を釜に移した。井戸端に持って行こうと立ち上がったとき、戸口に誰かがった気配がした。

顔を上げると、富岡八幡宮前で金貸しとやくざを二枚看板にした権造一家の代貸の五郎造と視線が合った。

「五郎造どのか、暑いな」

「親分かお呼びだぜ」

「そういえば親分には借りがあったな」

「覚えていたとは殊勝なこった」

五郎造がにやりと笑った。

「暫し待ってはもらえぬか。腹が減って戦はできぬと申すでな」

「ちぇっ。このくそ暑いのに、大の男が飯を炊くのを待てるけえ。飯ぐれえ、うちに来ればたらふく食わせてやるぜ」

「きょうか。仕度をいたすゆえ、しばらく門前でお待ちあれ」

「おめえさんと話してると日が暮れるぜ。早くしねえ」

磐音は五郎造を待たせ、備前包平二尺七寸と無銘の脇差一尺七寸三分を腰に差し落とした。それで仕度はできた。

六間堀町から富岡八幡宮まで五郎蔵と肩を並べて歩きながら、磐音は訊いた。

「親分の頼みごとはなにかな」

ひと月前、鰻捕りの幸吉が泥龜の米次に拐かされたことがあった。

そのとき、権造親分の手を借りて幸吉の行方を探したのだ。その返礼に、磐音は一度だけ剣の腕を貸す約束をしていた。

その取り立てに五郎造がきたのだ。

「おめえさんは深川不動が知っているけえ」

「前を通ったことはあるが、参拝したことはござらぬ」

「ござらぬときたか。あそこはうちの稼ぎ場だ」

深川不動は、元禄十六年に成田山が永代寺の門前を借りて、不動尊の出開帳をした時に始まる。以来しばしば、成田山新勝寺をはじめ、出開帳で人を集めていた。単に不動堂とも呼ばれて、地元の者に親しまれていた。

「深川不動の夏祭りは、うちの親分と川向うは浅草黒船町の勝八親分が交互に仕切る習わしになっていた。ところが、つい２日前、深川不動に打ち合わせに行ったと思いねえ。するとよ、顎の勝八の所から子分どもが来て、相談は済んだというじゃねえか。なんて話だってんで、親分とおれと黒船町に乗り込んだってわけだ。すると顎の野郎め、今年の夏祭りが深川不動はうちで仕切らせてもらうぜって、ふざけたことを抜かしやがる。親分が怒りなさって、顎、てめえはおれに喧嘩を売る気かと怒鳴りなさったが、顎の野郎、平気の平座でよ。ああ、そういうことだってぬかしやがったのさ。おれも親分も腸が煮えくりかえったが、浪人者まで出てきやがって、多勢に無勢だ。そんときは堪えに堪えて橋を渡って戻ってきたってわけだ。売られた喧嘩だ、こっちも人手を集めて出入りの仕度を始めた。ところが、昨日のことだ、うちの関わりの櫓下の女郎屋に五人の浪人者が上がって、遊女を揚げて盛大に飲み食いしたあげく、朝方、勘定が欲しければ顎の勝八親分に請求しろといったというじゃねえか。そいつを聞いた親分がかんかんに怒りなさってよ、子分を差し向けたと思いねえ。ところが浪人どもは腕に覚えがある野郎どもで、散々な目に遭わされてよ、四人が手足に怪我をして、医者の所に担ぎこまれたってわけだ。」

話の目処（めど）がついた頃、磐音と五郎造は、富岡八幡宮前の権造一家の戸口の前に辿り着いていた。

一家は殺伐とした重い空気に囲まれていた。奥座敷には喧嘩仕度の子分たちが控えている気配だ。

磐音は始めて権造の居間に通された。

多きな神棚の前の長火鉢には、派手な浴衣の権造がでんと座り、苦虫を噛み潰したような顔で磐音を迎えた。

「おめえさんに貸しがあったな」

「五郎造どのにも同じことを言われた。親分、念を押すまでもない」

「話は聞いたか」

「浪人五人にただで飲み食いされたようだな」

「飲み食いばかりか、子分四人が使いものにならねえ。金もさることながら、おれの面子が立たねえや。このままじゃあ、稼業にも差し障りがあらあ」

「顎の親分とはこれまで仲良くやってきたと聞いたが、急に何が起こったのかな」

「そこだ。顎の勝八は元々黒船町の先代の代貸だった男だが、先代が去年の暮れに急死しなすったあと、姉さんを誑し込んでよ、跡目を継いだんだ。先代は仲間とも町奉行所ともうまくやっていたもんで、顎の野郎には北町の臨時廻り同心がついていやがる。定廻り同心を長年務めた月形彦九郎という男だ。こいつは寺社方とも仲がいい。こいつの力を借りて、顎の野郎は川のこっちにも縄張りを広げてきてやがるんでえ」

「親分、顎の一家には何人も浪人者がいるという話ではないか。そいつらも月形どのの手下かな」

「浪人の頭領は、深甚流とかいう剣術の達人飯岡一郎助でよ、顎一家の近くに町道場を開いている三十五、六の大男だ。こいつの所に食い詰め浪人がごろごろしてるのさ。うちの関わりの見世で飲み食いしやがったのもこいつらだ」

「浪人どもは別にして、北町の同心どのが厄介だな」

「なんぞ知恵を働かせてくれ。おめえには貸しがあるんだからな」

「親分、そう何度も貸し貸しと言わんでもらいたい。それがしもこうして顔を出しておるのだ。十分、相談には乗るつもりだ」

言わねは考える素振りを見せた。

「親分、北町同心の始末はそれがしにまかせてくれ。少々時間が架かるやもしれぬがな」

「おめえさん、安請け合いしていいのけえ」

言わねには考えがあった。だが、そう易易と権造に話すつもりはない。腹をすかせた仲間がほかに二人もいるのだ。

「今年の夏祭りはなんとしてもうちで仕切る。祭りまでには３日をきってるが、それまでには決着をつけてえ」

「まかせてもらおう。まずは深甚流の用心棒の退治から取りかかろうか。その前に二つばかり相談だ。いささか腕に覚えがあっても、大勢の浪人相手に某一人で獅子奮迅の働きはできぬ。そこで二人ばかり助太刀を頼もうと思うが、よいかな」

「二人だと。仕方あるめえ」

「某はただ働きでかまわぬが、助太刀を頼む以上、仲間はそうはいくまい」

「仕方あるめえ、二人は一日一両でどうだ」

「今一つ、それがし、腹をすかせておる。飯を馳走してくれぬか」

「呆れた野郎だぜ。五郎造、台所でなんぞ食わせてやれ」

そう命じた権造はどこかほっと安堵の色を見せた。

蛸のさくら煮、牛蒡、人参、蒟蒻、椎茸などの野菜と、鶏を炊き合わせたものなど、金貸しとやくざの稼業はなかなかの繁盛とみえる。

「おまえさん、よく食うな」

満足げな表情で茶を飲む磐音を見て、中年の勝手女中のおかつがびっくりした顔で行言った。

「味付けが実に結構でござった。母上の料理とよく似ておりました」

女中は笑みを浮かべた。

「おまえさんのおっ母さんはどこにおられるだね」

「江戸から二百六十余里も離れた西国でござる」

「江戸で腹を減らしてると知れば、心配もされようが。おまえさんも、ちったあ性根を入れて働かねばなんねえぞ」

女中は磐音に説教を垂れた。

「そうじゃな、いつまでも心配をかけてはならぬな」

磐音は真剣にそう思った。

「おめえさん、いつまで台所に座り込んでいるつもりでえ。飯を食った分だけ働きやがれ」

五郎造が台所に顔を出して怒鳴った。

「そろそろ神輿を上げようと思っていたところだ。まずは人集めに参る。今夜からこの家に泊まることになるが、それでようか」

「親分もその気でいなさる。仲間を連れて夕刻までには戻ってきてくんな。またこの前みてえに、顎一家の浪人どもに好き放題飲み食いされねえとも限らねえからな」

五郎造は磐音を頼りにしているように言った。

「五郎造どの、任せておいてくれ。その代わり、飯だけは昼のように存分に頼む」

「なんて情けねえ侍でえ」

五郎造は舌打ちした。それでも、

「早く行ってくんな」

と送り出した。

磐音は今朝ほど訪ねたばかりの北割下水に、再び品川柳次郎を訪ねた。すると、柳次郎派井戸端で裾をからげて洗濯をしていた。

盥は汚れ物で溢れている

「精が出ますか」

「母上の手伝いですよ」

品川柳次郎が苦笑いし、

「坂崎さんが二度もうちに顔を出すとは、仕事が見つかりましたか」

と期待に満ちた顔をした。

「富岡八幡宮前でやくざと金貸しを兼業する親分の用心棒の口がありました。一日二分、三度三度の飯付きです。やりますか」

「もちろんやります。母上の手伝いをしたからとて一文にもなりませんからね。用意する間、しばらく待ってください」

壊れかけた門前で磐音が待っていると、柳次郎の母上の幾代が顔を出した。まくわ瓜を一切れ載せた皿を手にしていた。

「柳次郎がいつもお世話になります」

磐音は慌てた。未だちゃんとした挨拶をしたことがなかった。

「こちらこそ世話になっております。それがし、六間堀の金兵衛長屋に住まいいなす坂崎磐音と申す者にございます」

「お話は柳次郎から伺っていますよ」

磐音はふと、年格好が同じくらいの故郷の母を思い出した。

「こんなものしかいありませんがよう冷えております。お食べなさい」

「頂戴します」

富岡八幡宮から急いで来た磐音には、冷たく冷やされたまくわうりがなんとも美味だった。

「お待たせしました」

よれよれの単衣の着流しに大小を落とし差しにした品川柳次郎が出てきて、

「瓜を食わされましたか。庭で穫ったものであまり甘くはないでしょう」

とわらった。そして幾代に、

「母上、坂崎さんが仕事を持って参られた。首尾よくいったらなんぞ美味しいものでも買うて戻りますぞ」

と言い残すと磐音を誘って門を出た。

二人の足を南割下水吉岡町のどんづまりに住む竹村武左衛門の半欠け長屋に向かった。貧乏御家人や食い詰め浪人らが多く住むその一帯は、本所深川界隈でも一段とひどい場所だ。

夏の季節、縦横に走る溝は乾ききって、ぼうふらが湧水もない、ただ埃っぽい家並みが黄ばんだ洗濯物の間に広がり、むうっとした湿気と饐えた臭いが立ち込めていた。

「竹村さん、仕事だぞ」

武左衛門が出てくる前に、長女の早苗と長男の修太郎が飛び出してきた。

「ああ、良かった。父上と母上は数日前んい喧嘩して以来、口も利かれないのです。これで仲直りができそうです」

母親の勢津が乱れた髪を気にしながら出てきて、

「これ、早苗、うちの恥を他人様に大声で話すものではありません」

と制止したがもはや遅い。

「勢津どの、仲直りができそうな仕事の口を坂崎さんが見つけてこられた。もうしばらくの辛抱です。二、三日待ってください。」

竹村武左衛門が塗の剥げた刀を手に姿を見せ、

「待たせたな」

「行き先は富岡八幡宮です」

「唐天竺でも参るぞ」

とほっとした顔を見せた。

本来、南割下水とは旗本諸家が屋敷を連ねる一帯である。ところが武左衛門の住む吉岡町は、南割下水とは名ばかりの極貧のものたちが住む一角だ。町内を抜けると武左衛門は大きな溜息をついた。

「勢津どのとの喧嘩は金のことですか」

「ほかになにがある」

武左衛門は柳次郎に突っかかるように言い、慌てて取り繕った。

「すまぬ。家内の揉め事でつい気が立ってしまった。坂崎さん、仕事とはどんな類かな」

磐音は権造一家に降りかかった難儀について話て聞かせた。

「ちょっと待った。坂崎さんはただ働きか」

「借りがあるので仕方がありません。そのうちよいこともあるでしょう」

「坂崎さんらしい話だが、ただ働きはしんどいな」

「坂崎さんも柳次郎も考えが足りぬな。それがしの見立てでは、やりようによっては銭になる話だ。坂崎さんとて、権造に借り分以上の義理はあるまい」

「幸吉の行方を探し出してくれた借りを返せばいいだけですが、相手が北町奉行所の臨時廻り同心ともなると厄介ですよ」

「そっちは坂崎さんの知恵の絞りどころだ。それがしが言うのは、顎の勝八と権造親分をうまく操る事ができれば、それなりの金になるということだ。」

「竹村の旦那、坂崎さんの性格を考えてみろよ、小さいとはいえ借りは借りだ。それを裏切って顎の勝八に寝返るなんてできっこないさ」

「それがしは裏切れなんて言ってないぞ。二つの争いの間隙を衝けば金が転がり込むと言っているだけだ」

「そいつに期待しよう」

品川柳次郎がその話題に蓋をするように言った。

「深甚流の飯岡一郎助について、お二人は何ぞご存じないですか」

あると答えたのは竹村武左衛門だ。

「深甚流は元々、加賀の百姓の子である草深四郎が始めた剣法でな、塚原卜伝に新当流を習って深甚流天狗小太刀の開祖になったそうな。加賀に中条流が入る以前は深甚流が加賀のお家流だったというぞ。飯岡一郎助は、この深甚流直系を名乗っている男でな、六尺二十貫を超える巨漢だ。それがしが一度黒船町を通りかかった折りに道場を覗いたことがある。利き腕の右手に四尺余りの木刀、左手に二尺余りの小太刀を持って稽古する様は、まさに仁王か阿修羅の形相でな、なかなかの腕前とみた。それに顔が鬼瓦のように物凄くてな、まあ、闇夜には会いたくない御仁だな」

「一度拝見するとしよう」

と磐音が答えた時に、三人は富岡八幡宮前の権造親分の家の前に辿り着いた。すると玄関が騒がしい。

「おおっ、帰ってきたか」

五郎造が声を上げた。玄関先に露天商の男たちが六、七人いて、権造に何か訴えていた。

「いいとこに帰ってきたぜ。こいつらはよ、本所深川一帯で祭りを追って商いをする香具師の連中だ。不動堂でも見世を春ことになっているんだが、顎の勝八のところから回状がきたそうだ」

権造親分は手にしていた回状を、ふざけた話だぜと言いながら磐音に渡した。

磐音は書状を広げた。達筆である。

通告状

この度、本所深川一帯の神仏閣についての祭礼仕切りは浅草黒船町の顎の勝八の仕切るところになりし事、お呼びこの一件、北町奉行所臨時廻り同心月形彦九郎様お許しの旨、通告致し候。

この変更に伴い、

1. 露天商いのショバ代一祭礼につき一店一日一分、半金前納の事
2. ショバ割は三日前の昼前、祭礼地にて挙行決定の事

右通告致し候

「ふざけた真似をしやがって、このおれの面を踏みつけにするにもほどがあらあ。旦那方よ、ショバ代は昔から一日二百文ときまってるんだ。そいつを一気に五倍にねあげたあ、一体全体どういうこった」

権造が顔を真赤にして怒鳴った。

「親分、われらに怒った所で致し方あるまい。どうせよと言われるのかな」

「こいつらはおれに、顎に掛けあって元に戻してくれといっていやがるんだ。どうしたもんか」

権造も思案に暮れた表情だ。

「親分、ここは一番、親分自身が貫禄をみせて、顎の勝八に直々に掛け合うしかあるまい」

「おれがいきなり面ぁ出すのけえ」

金貸しの権造は尻込みした。

「親分、顎の親分の顔も見ておきたいでな、それがしも同道しよう。それに香具師の方々も何人かご一緒願おうか」

「親分、わしらもですかい」

露天商たちも怯えた顔をした。

「そなたらに宛てた回状ではないか。当人が持参せずば名目が立つまい。なあに、そなたらニケがをさせるようなことはさせぬ」

磐音が請け合い、香具師たちが額を寄せて話し合った末に、二人が代表で出向くことに決まった。となれば、金貸しの権造も出張らないわけにはいかない。

「五郎造、猪牙舟を用意しな」

と命じた。

二

７つ、富岡八幡宮から猪牙舟に乗ったのは、船頭のほかに、金貸しの権造親分、香具師の飴細工の富吉、竹笊売りの勘太郎、それに坂崎磐音の四人だ。

権造は、

「おめえさん一人で大丈夫けえ」

と心配したが、

「今日は掛け合いで喧嘩ではあるまい。多勢で押しかければかえって、騒ぎが大きくなろう」

と、磐音一人が同行することにしたのだ。

夏の日はまだ、雲ひとつない空高くにあった。が、水面を吹き渡る風には涼気があって気持ちがよかった。

舟は蓬莱橋、黒船橋、三蔵橋、武家方一石橋と潜って、大川に出た。河口近くから永代橋、新大橋、両国橋と、流れに浮かぶ橋を見ながら、御厩河岸の渡しの先で浅草黒船町の河岸に着けた。

船頭を船に残して、四人はようやく日が翳り始めた町に上がった。顎の勝八一家は、お米蔵から浅草に抜ける浅草お蔵前通り沿いの、間口八間ほどの堂々とした構えであった。障子戸には、

金竜山浅草寺御用黒船勝八

とあった。

「ごめん」

さすがは一家のかしら、金貸しの権造だ。顎一家の前までくると背筋を伸ばして、敷居を跨いだ。玄関先の上がりかまちにいた子分が慌てて奥に走り込んでいった。

「金貸しがまた何の用でえ」

顎の勝八が貫禄を見せて玄関先に出てきた。

ひょろりとした痩身に長い顔が乗っていた。さらに異名の顎が、茄子のように曲がって顔の前に突き出していた。

「何の用とは挨拶だな、勝八。おめえの用心棒どもがうちの関わりの店で飲み食いした付けの取り立てに来たんでえ。女郎の揚げ代と合わせ、締めて十両と二分三朱、そっくり耳を揃えて払ってもらおうかい」

顎の勝八が笑い出した。すると痩せた体がカタカタと鳴った。

「おめえ、暑さに頭をやられたか。おれの用心棒がどこで飲み食いしようと、おれが払ういわれはねえや。日が高いうちに川を渡って、櫓下に戻るこったぜ。金貸しの権造さんよ、うちにゃ、気が荒れえ者が手ぐすね引いて待ってるんだ」

「そうか、それならそれでこいつはいったん置いといて別口にかかろうか。富吉、勘太郎、入ってこい」

権造が表に向かって叫ぶと、磐音に背を押された二人がおずおずと入ってきた。

続いて磐音も従った。

「なんでえ、てめえら。話し合いなら祭りの場でと命じてあるぜ」

顎の子分の一人が叫んだ。

「そいつをな、断りに来たんだよ」

「その付き合いが金貸したあ、気の毒なこったぜ。おめえら、足腰を叩き折られねえうちに出ていきな。今日の所は見逃してやらあ」

顎の勝八がじろりと睨んだ。

富吉と勘太郎が顔を伏せた。

「野郎ども、叩きだせ」

顎の勝八の命に、子分太刀が懐の合口や長脇差を抜きながら、金貸しの権造や露天商太刀に詰め寄ってきた。

富吉と勘太郎がなにか叫びながら、外に飛び出そうとした。

その背後から磐音がゆっくりと顔を見せた。

「顎の親分、今日は話し合いに参った。乱暴はいかんぞ」

「金貸しの野郎、落ち着いてやがると思ったら、浪人を一匹連れてきたか。ままうこっちゃねえ。こいつも叩きだせ。」

子分の一人が合口を腰にぴたりと付けて、何の気配も見せず、磐音の腹めがけて切っ先を突き入れてきた。

磐音が体を開いた。

実にのんびりした動きのように見えたが、きらめく合口の切っ先との間合いっを読みきって体を開き、合口を握った手首を掴むと瞬時に捻り上げていた。

子分の体が虚空に舞って土間に叩きつけられた。

「ううう」

唸り声を揚げて子分は気を失った。

「軍蔵、道場の先生を呼んでこい」

子分の一人画素とに飛び出した。

深甚流の道場主飯岡一郎助を呼びに行ったのであろう。

その間に、残った子分たちが磐音を囲んだ。

磐音は土間の中央に歩を進めた。

「顎の親分、さっきも言ったが、喧嘩に参ったのではない。権造親分は話し合いに来たのだ。親分同士、仲良く深川不動の祭りを取り仕切れぬか」

「てめえら、さんびんが能書き垂れるのを突っ立って聞いてるばかりか」

顎が怒鳴ると痩せた体がまたカタカタと鳴った。

「親分、あっしが始末をつけてやりまさあ」

俊敏そうな若い衆が長脇差を翳して、縁日の夜店でも見物する日のようなのどかな風情で佇む磐音の眉間に切りつけてきた。

再び春風が舞った。

実に長閑な動きに見えた。

だが、磐音は長脇差の下に入り込むと、相手の腕を抱え、片膝の上に体をのせて跳ね上げていた。

見事に宙を舞った若い衆が、これまた土間に叩きつけられた。

磐音の左手に長脇差が残っていた。

「うっふっふっふ」

金貸しのごんぞうが嬉しそうに笑った。

「くそっ」

新手が二人がかりで磐音に襲いかかってきた。

磐音が長脇差を見ねに返して右に左に片手で振った。すると長脇差やら合口が宙に飛び、その上、子分たちは肩や脇腹を抑えて土間に転がった。

神田三崎町の直心影流の佐々木玲圓道場でもう稽古を積み、目録を得た磐音だ。

佐々木道場の目録はほかの道場の免許皆伝に匹敵する、といわれる佐々木道場で三年の修業を積んだ後、磐音は運命に翻弄されて親友と立ち合う羽目に陥り、修羅場を体験してもいた。

豊後関前藩暇乞いして江戸に出てくると、見過ぎ世過ぎを剣に頼って生き抜いてきたのだ。わずか一年の間に幾多の修羅場を潜り抜け、師匠の佐々木玲圓に驚愕される腕前になっていた。

腕自慢のやくざが太刀打ちできる相手ではない。

「ちくしょう」

と顎が舌打ちしたとき、

「親分、道場のっ先生方を連れて来やしたぜ」

という声がして、見るからに怪しげな浪人が四人飛び込んできた。

「橡さん、先生はどうした」

「飯岡一郎助どのが所要でおられぬ。なあに浪人の一人や二人、われらで十分でござる」

橡と呼ばれた剣客が四人の頭分と思えた。

色黒の顔に無精髭を生やし、汚れた袖からにゅっと出た腕は、丸太のように太かった。背丈は五尺四寸ばかり、胸板も厚く、猪首の男だ。年格好は、三十五、六か。

「橡どの、それがしは喧嘩に参ったのではない」

磐音がのんびりした声で言った。

「ふざけたことをぬかすな。土間に転がっているのはなんだ。おまえがやっておいて、喧嘩に来たのではないとぬかすか」

「これは相済まぬことをした。勢いでな、こうなった」

「流儀と名を聞いておこうか」

「神田三崎町の佐々木先生のもとで三年ばかり稽古を積んだ、坂崎磐音と申す者でござる。以後、よしなに。」

「直心影流か。面白い、腕前を見てつかわす」

「そなたはなんと申される」

磐音の気はあくまで長閑に響いた。

「橡陣十郎、神伝流免許皆伝だ」

正式には奥山理想神伝流という。祖は堀丹波守直央が興した流儀ということしか磐音には分からなかった。

「免許皆伝とはなかなかの腕前でござるな」

橡が草履を跳ね飛ばすように後ろに脱ぎ捨てた。

朱鞘の剣を抜いた。すると仲間の三人が橡を援護するように刀を抜き連れて橡の左右に展開した。

橡は身幅の厚い剣を八双に構えた。

磐音は手にしていた長脇差を捨てた。

国許を出る時に屋敷から持ちだした伝来の備前包平二尺七寸をそろりと抜いた。

正眼に、静かにつけた。

橡が、

（なんだ）

という表情を見せた。

国許の剣の師匠中戸信継が、

「…春先の縁側で日向ぼっこをしている年寄り猫のようじゃ。眠っているのか起きているのか、まるで手応えがない。こちらもつい手を出すのを忘れてしまう。居眠り磐音の居眠り剣法じゃな」

と評した構えを橡は侮ったようだ。

八双の剣の切っ先を上下に揺らして間をとっていた橡陣十郎の双眸が充血したように地走り、細くなった。

磐音は不動のままだ。

「おおっ！」

橡が絶叫するのに呼応して動いたのは、橡の右手に控えていた小柄な浪人だ。

背を丸めて、中段の剣を下から伸ばし上げるように磐音の喉元に突きを入れてきた。

春風駘蕩の磐音が豹変したのはまさにこの瞬間だ。

包平を手元に引き寄せるとその反動を利して前方に送った。

突きの襲撃に擦り合わせて、

ピーン

と弾き返した。同時に包平が峰に返されて、小柄なけんしの下半身をしたたかに叩いていた。

ぼきり！

という不気味な音がおご一家の玄関先に響いて、壁板に体をぶつけた相手が倒れこんだ。

橡陣十郎が八双の剣を磐音に叩きつけてきた。

神伝流の免許皆伝と自ら誇るだけに、刃風鋭く磐音を襲ってきた。

磐音は虚空に跳ね上げていた包平を上から橡の八双に合わせた。

それは音もなく真綿で包まれたようだった。

橡はそれでも包平から剣を引くと、磐音の首筋に二の手を送った。

磐音は悠然と合わせた。合わせながらう脱ぎの動きを読んでいた。

ｓれが橡を苛立たせた。

「おのれ！」

橡陣十郎はしゃにむに連続攻撃を磐音に送り込む。

そのことごとくが手応えもなく絡めとられ、押し返された。

磐音は援護に回った二人の動きに注意しながら、橡と対決していた。

二人は磐音の後方に回り込もうとしたが、複数の者が剣を振り回すには狭すぎる屋内と、磐音が微妙に位置をかえる動きについていけないでいた。

「何をしておるのだ！」

橡は仲間に怒鳴ると自ら間合いを外した。

荒い息を肩でつきながら、

「こやつ、鵺のような男だ。一気に押し包んで始末するぞ。」

と仲間の二人に命じた。

「権造親分、どうしたものかな」

磐音が権造に声をかけた。

「旦那、顎の用心棒は三下奴だ。いつまでも遊んでねえでそろそろ決着をつけなせえ」

権造のけに余裕が出てきた。

「そうだったな。今日は掛け合いにきただけだ。手間を取っては退屈か」

橡らが決死の態勢で磐音を囲んだ。

中央に橡陣十郎が、右手に長身の若い浪人、左が小太りの壮年の男だ。

磐音は再び峰に返した包平を正眼に戻した。

間合いは互いの切っ先が一尺余り、手を伸ばせば包平の切っ先が橡の切っ先に触れるほどだ。

橡は弾む息遣いを鎮めた。

修羅場をくぐり抜けてきた古強者だけがなしうる技だ。

三人が阿吽の呼吸で磐音への攻撃を確かめ合った。

磐音は受けの剣を捨てた。

正眼の剣が動きの気配さえ見せずに仕掛けた。

突如、疾風が顎一家の玄関先に巻き起こった。

左に一気に飛ぶと、小太りの剣士の肩口を刎ねるように叩いた。

橡が迅速に対応して、磐音お胴を抜こうとした。

磐音はすでに包平を手元に引きつけて、相手の抜き胴に胴打ちで応じていた。

のんびりとした剣風が一変し、熱い風が舞起こって、橡のあばら骨をぼきりと響かせて数本へし折っていた。

二人が同時に土間に転がった。

残る長身の浪人は、一瞬の間に倒された雷撃の攻撃に怯えながらも突っ込んできた。

磐音は再び居眠り猫に戻って、相手を手元まで引き寄せ、剣を絡め落としていた。

「今日は挨拶にござれば、これまで。引き上げなされ！」

凛然とした磐音の声に、空手で立ち尽くしていた浪人が橡らを連れて外に転がり逃げた。

「顎、おめえの用心棒はあんなふうで大丈夫かえ」

金貸しの権造の声もどこか晴れやかだ。

磐音は権造が書き付けを上がりかまちに置くのを見ながら包平を鞘に戻した。

「親分、こちらの用心棒どのの狼藉で子分の方が怪我を負ったのであったな。顎の親分は治療代も持つと言うておられるぞ。なあ、顎の勝八どの」

「おおっ、いいところに気が付きなさった。顎もこれでなかなか物分りのいい男でな。飲み食いの代金十両二分三朱と合わせて切り餅一つももらっていこうか」

権造が上がり框に書き付けを放り投げた。

顎の勝八は悔しそうな顔で奥に自慢の顎をしゃくりあげた。

奥から派手な芝居柄の浴衣をぞろりと着た年増女が姿を見せて、顎に突き出した。

「おや、これは先代の姐さん、元気そうで何よりだ。先代はできたお人だったねえ。姐さんも顎なんぞにくっついていなさるとろくなことはねえよ」

と女の手から二十五両をひったくった金貸しの権造が、

「念には及ぶめえが深川不動の夏祭りは例年通りうちが仕切るぜ。それと香具師のショバ代はいつもどおりにしてくんな。貧乏人が泣きを見る世の中じゃあ、いけねえからな。邪魔したな、顎の勝八」

捨て台詞まで残した金貸しの権造が気分よく顎一家の玄関を出た。

磐音も顎の親分に会釈すると権造に従った。

「おめえさん、おれが見込んだだけのことはあらあ」

日が沈んで涼しくなった大川を渡る猪牙舟の上で、金貸しの権造は満足そうに磐音に言い、

「今日はおめえさんの機転でよ、顎の鼻を明かした。こいつは、小遣いだ」

と二両くれた。

「ありがたい。このところ、米も味噌もきらして、家賃も溜めておった。これでなんとか暮らしが立ちゆく」

「おめえさんは奇妙な侍だ。鰻捕りの餓鬼を助けるために命を張るかと思えば、律儀におれの借りを返してもくれる。育ちがいいのか、それとも人がいいだけなのか」

「親分、約定は約定ですからね」

「本当に変わった侍だぜ」

権造がまた呆れた。

「親分、それがしのことより顎一家の出方だ。これで黙って引っ込むとも思えん」

「そこよ、ひと悶着あるだろうな。まずは深川不動の夏祭りが山になろうぜ」

「われら三人が交代で親分の家に泊まるゆえ、心配はいらぬ」

猪牙舟は櫓下の堀へと入っていった。すでにとっぷりと日が暮れていた。

富岡八幡宮前の船着場は四人は降りた。

香具師の富吉と勘太郎が二人にぺこぺこと頭を下げて、家に戻っていった。

権造一家では赤々と篝火を焚いて、喧嘩仕度で権造らの帰りを待っていた。

「あっ、親分のお帰りだ！」

子分の一人が気付いた叫んだ。すると代貸の五郎造を先頭にどっと玄関先に姿を見せた。

品川柳次郎も竹村武左衛門も刀を手に出てきた。

「喧嘩仕度は当分なしだ。この浪人さんが顎の用心棒を四人ばかり叩き伏せたからよ。顎の野郎、目の玉でんぐり返して驚いてたぜ。飲み食いの代金から治療代までふんだくってきた。こういうのを溜飲が下がるというだろうな」

金貸しの権造が満足気に今に引き上げ、五郎造が磐音に、

「ご苦労だったな」

と労った。

「五郎造どの、いささか腹が減った。夕餉を頼む」

「おめえさんの仲間も食べずに帰りを待ってたぜ」

「それはすまぬことをしたな」

五郎造に案内されるように台所に行くと、板の間に箱膳が３つ並び、酒まで添えられていた。

「こういう時期だ、酔っ払うまで飲んじゃいけねえぜ」

念を押す五郎造の声もなんとなく優しく聞こえた。

「お待たせしました」

「首尾がうまく言ったようですね」

柳次郎が訊いた。

「火種は十分残っていますから、深川不動の祭りの日までは働けるでしょう」

「しめた、二両になるな」

と素早く計算した武左衛門が呟く。

「ともかく、当分三人で寝泊まりすることになるでしょう」

「相分かった」

竹武左衛門が待ち遠しいという顔で相槌を打ち、徳利を手にした。

膳には鯖の焼き物、煮しめ、おからと野菜の炒り煮、具だくさんの汁、それに一夜漬けの胡瓜が並んでいた。

「これは馳走だ。だが酒より飯だ。」

磐音は自分の徳利を武左衛門に渡し。

「よいのか、坂崎さん。おれも柳次郎も今日何もしていないぞ」

「そのうちお二人が働くおりもありますよ」

磐音は夕餉を食べ始めた。すると誰かが声をかけても上の空、いや、飯をたべることに没頭して赤子のような顔に変わった。

三

翌朝、富岡八幡宮前の金貸しの権造の家を出ると、六間堀北の橋詰にあった鰻屋の宮戸川に向かった。

これが磐音の常雇の仕事だ。

本所深川一体は川や堀や湿地が数多くあって、鰻や鰌がたくさん捕れた。その鰻を使って鰻屋が何剣か店を開いていた。

宮戸川の鉄五郎親方は目端の利いた男で、この一帯で捕れる鰻を利用して流行り始めた鰻屋を開き、たちまち繁盛店に仕上げた。

今では、六間堀の宮戸川は安くて旨いと評判が立ち、川向こうから橋を渡って食べに来るほどだ。

この朝も下職の松吉と次平の三人で何百匹もの鰻と格闘した。それが終わると五つに近い。道具を片付けて刃物を研ぎ、井戸端を掃除し終えて鉄五郎親方の朝餉に相伴する。

これが日課だ。

「噂に聞いたが、金貸しの権造の手伝いをなさっておられるようですね」

「おおっ、知っておられたか」

平然と答える磐音に鉄五郎が呆れ顔で、

「まあ次から次と奇妙な稼ぎばかり見つけてこられるもんだな」

「これには少しばかり理由がありましてな」

「幸吉の一件でしょう。ともかく呆れ返って二の句がつげねえや。金貸しなんぞとの約束を律義に果たしておられるんですかい」

「約定は約定です。それに品川さんと竹村さんの稼ぎにもなるし、それがしもゆうべは格別に二両の褒賞を頂いた。」

「まあいいや、ご当人が気に入っているのならね。それにしても顎の勝八の野郎、えらい横車を押してきたもんだ。坂崎さん、相手の道場主もいるこった、十分に気を配ってくだせえよ。坂崎さんはうちの大事な鰻割きなんだからね」

と最後は苦笑いしながら言った。

磐音は宮戸川の裏口から出ると、すでに日差しが強くなった六間堀を金兵衛長屋に戻った。すると大家の金兵衛が、木戸口に植えられた糸瓜の蔓を鋏で切っていた。

糸瓜水を採るのだという。

「大家どの、家賃が滞って相済まぬ。まずは一両ほど受け取ってもらいたい」

「坂崎さん、金貸しの権造の仕事をしてるんだってな」

さすがに六間堀の老人は早耳だ。

「いやさ、幸吉が、おれのために権造のところ出働いてるって、申し訳なさそうな面で教えに来たんだよ。いつもは、いけすかねえ親分だが、今度ばかりは深川の露天商のためにもなることだ。それに川向うの顎の親分なんぞに、不動堂の夏祭りを仕切られたんじゃ腹が立つ。しっかり金貸しの肩を持ってお働きな」

と激励された。

「ならば働きに参る」

と木戸口から引き返そうとすると。

「そうだ、忘れるところだった。坂崎さんの所に女の人が見えて、手紙を預けていったんだ」

と金兵衛が言い出した。

「女性にござるか」

「武家屋敷務めだねえ、あの物腰は」

金兵衛はそう言うと、

「今、手紙を持ってってやるから、長屋に風でも入れときな」

と我が家に向かった。

やくざの揉め事が朝早くから起こるとも思えない。

金兵衛の忠告に従い、長屋の戸を開けた。

むうっとした熱気が顔に押し寄せてきた。

磐音は大小を抜くと表戸と裏の障子を開き、風を通した。

鰹節屋から貰い受けた壁際の箱の上に、三柱の位牌が並んでいた。

終生の友であるべき小林琴平、河出慎之輔、それに慎之輔の妻であった舞の三人の位牌だ。その箱の前を片付けて、水を取り替え、位牌を並べ替えて、両手を合わせた。

そこへ金兵衛が、これだと一通の書状を持参してきた。

「造作をかけました」

磐音が手紙の主をたしかめると、豊後関前藩江戸屋敷の中間頭斎藤六助の娘、野衣からのものだった。

野衣は磐音の朋輩、勘定方六十七石上野伊織の許婚だった。

伊織は半騒動に絡み、守旧派宍戸一派の不正を探ろうとご文庫に忍び込み、敵方に見つかって殺されてしまった。

伊織の死と、国許で磐音が小林らと闘争に及ぶにいたった事件は、黒々と磐音の胸の中に横たわっていた。

野衣の手紙は当然旧藩絡みと考えられた。

磐音は書状を開いた。

＜坂崎磐音様、急ぎ一筆認め参らせ候。江戸藩邸の出入り再び激しく、国表より急使も再三に及びおり候。殿様の参勤の時節にございますれば、そのことの連絡かとも考えおり候。

さて昨日、国許より早足の仁助どのが藩邸に到着、お直目付中居半蔵さまに早飛脚を届けられた由。この仁助どのは昔父の部下に一人にて、御用が終わったあと、わが御長屋に顔を出され、国許の四方山話をしていかれ候、その話尋常ならず、関前城下にて聞き及びし風聞、聞き捨てならず。ご迷惑と候えど連絡致し候。

伊織様の一件あり候わば、いつぞやの茶店にてこれより毎日昼時分にお待ちいたし候。

坂崎様、ご都合よろしき折り、お出かけのほどお願い致し候。　野衣＞

豊後関前から江戸までの二百六十余里、参勤交代の日程はおよそ三十五、六日から四十日を要した。

早足に仁助は、馬や駕籠を乗り継いでの早打ちとほぼおなじ十二、三日で駆けとおすことができた。

（そうか、藩主福坂実高様のご参府の時期か）

おそらく実高さまは関前から江戸への道中にあるのだろう。となると、野衣が考えたように参勤行列に関しての急使が頻繁に屋敷に到着していることは考えられた。

だが、国表の風聞とはなにか。

磐音は今日にも野衣に会おうと思った。

となれば、まず金貸しの権造親分に断らねばなるまい。顔を上げて、金兵衛はと見ると、遠慮したか姿を消していた。

磐音は長屋の井戸端に行くと手足と顔を丹念に洗った。

鰻を何百匹も割くと生臭い臭いが体に染み付くのだ。ついでに髪も濡れた手で撫で付け、長屋に戻ると再び戸締まりをした。といっても泥棒に入られて盗まれるような金目のものはなにもない。

脇差しを差すと包平を手に長屋を出た。

さらに気温が上がっていた。

磐音は六間堀から櫓下まで早足で歩いた。

金貸しの権造一家の玄関先も中ものんびりした空気が漂っていた。

奥からは武左衛門の高笑いも響いてきた。

「おめえさんも忙しいな、鰻割きが毎朝の仕事だってな」

代貸の五郎造が、帰ってきた磐音を見て言った。

「五郎造どの、ちと急用ができた。神田明神まで行かねばならぬ。８つまでには戻って参る」

「まあ、昨日の今日だ。親分は夕刻にも深川不動に出掛けるといっていなさる。それまではおめえさんの仲間でなんとかなろうぜ」

磐音のけを聞きつけ、品川柳次郎と竹村武左衛門も上がり框に姿を見せた。柳次郎が心得顔に、

「話はききました。後は俺たちに任せてください」

と快く許してくれた。

「すまぬ。急いで戻ります」

神田明神は江戸でも古い神社の一つで、上野伊織が殺された直後、野衣からこの境内の茶て店に呼び出されていた。茶店の女主が知り合いとかで、神田川を越えれば豊後関前藩の江戸屋敷からもそう遠くはない。

４つ半過ぎには神田明神の茶店に顔を出していた。縁台に据わるか座らぬか、すぐに野衣が姿を見せて、

「お久しゅうございます」

と挨拶した。

「野衣どのも少しは落ち着かれたか」

許婚の上野伊織が殺されて二月余りが過ぎたばかりだ。

「はい、お陰様にて普段の暮らしに戻りましてございます」

「すまぬな、まだ約束の墓参りに行けずにおる」

磐音は、伊織を直接手にかけた入来爲八郎と黒河内乾山を討ち果たした後、伊織の墓参りにいこうという野衣都の約束を果たしていないことを詫た。

「いえ、坂崎様が、伊織様の仇、入来様と黒河内様のお二人を討ち果たされましたこと、ひそかに喝采を叫んでおりました。墓参りの機会はいずれ訪れましょう」

「野衣どの、国許の風聞とはどのようなものかな」

磐音は話題を転じた。

「しばらくお待ちを」

野衣は茶店の奥に消えた。しばらく待たされた後、野衣が姿を見せて、

「坂崎様、こちらへ」

と茶店の奥の小座敷に案内した。するとそこには中間風の男が控えていて、

「坂崎様、お久しぶりにございます」

と顔を下げた。

「早足の仁助ではないか」

「はい、坂崎様を最後にお見かけしたのは、御番の辻で小林琴平と壮絶な戦いをなされた昼下がりのことでございました」

「見ておったか」

磐音は不意を衝かれたように言った。

磐音と河出慎之輔と小林琴平の三人は、江戸参勤を終え、関前城下に帰着した。

その翌朝、磐音は、河出慎之輔が妻の舞を不義の咎で成敗し、妹舞の亡骸を受け取りにいった琴平が、今度は慎之輔を討ち果たしたとの知らせに驚愕させられた。

関前藩の財政は逼迫していた。

関前はん中興の祖といわれた国家老宍戸文六は年老いてなお藩政を牛耳り、旧態依然とした藩政を続けていたからだ。

江戸で磐音たちは関前の藩政と財政を立て直すために修学会という集まりを催し、新しい考えを導入しようと張り切って帰国したところだった。

それが舞の不義騒ぎでいっきに瓦解した。

幼馴染の慎之輔を殺した小林琴平は錯乱した。

舞の不義の噂を流した山尻頼禎を惨殺した琴平は藩の追及を受けることになった。磐音は上意討ちの討ち手に自ら志願して友と戦い、勝ちを制した。

傷心の磐音は藩を離れて江戸に出、浪々の暮らしを始めた。

そんな磐音に、

「親友三人を悲劇の淵に誘い込んだ一連の事件の背後には、隠された真実があるのではないか」

と示唆したのが勘定方上野伊織だった。

伊織と磐音はそれぞれの立場から調べ始めた。

関前藩に一万六千五百両もの借財があることを調べ上げてくれたのは、両国広小路米沢町に店を構える両替商今津屋呪う分番頭の由蔵だ。

その調べによると、江戸家老篠原三左の名で借りられたものだという。しかしながら、篠原はこのところ病気がちの上に老齢、一万六千五百両もの大金を借り受けて天領飛騨から切り出された材木相場でひと稼ぎしようという気力はなかった。

伊織はこの知らせに基づいてご文庫の帳簿を調べようとして、入来たちの罠に落ち、拷問を受けた末に殺されたのだ。

磐音は伊織の仇を討った後、豊後関前藩の守旧派に一人孤独な戦いを挑もうとしていた。

磐音の追憶を断つように仁助が言った。

「あの昼下がりの出来事以来、城下は火が消えたようでございます」

磐音は話題を転じた。

「なんぞ城下によからぬ噂が流れているそうじゃな」

仁助は頷くと、

「その前にあっしがだれに早打ちを命じられたか、そのことから申し上げます。総目付の白石孝盛様から、江戸の後直目付中居半蔵様に宛てられたものにございます」

「なにっ！白石様とな」

白石孝盛は磐音の父親、中老坂崎正睦の碁敵であり、釣り仲間であり、幼き頃からの親友であった。

「はい、殿様の参府行列が関前の港を発ったのが四月の二十五日のことでございました。あっしはそれから８日後の夜に白石様に極秘に屋敷に呼び出されて、その場から江戸に走る事になりました。大阪まで海路を行かれる殿様の行列を、あっしは山陽道で追い越したことになります。白石様は、この書状を中居半蔵様以外に渡してはならぬと厳命なされました。さて、城下に流れる風聞にございますが、殿様が発たれた後、国許で人事が大幅に刷新されるという噂にございます。むろん指揮をなされるのはご家老の宍戸文六様にございましょう」

「実高様が発たれた後に国表で人事に着手されるとな」

いくら中興の祖とはいえ、独断専行に過ぎる振る舞いであった。

「噂にございますが、お父上の正睦様は蟄居閉門にございます」

「父上が何の咎をもって、蟄居閉門の憂き目にあわねばならぬ」

「坂崎様、口さがない噂にございます。正睦様に不正の事実あり、と。いえ、これは風bんにございます。」

父の清廉潔白は磐音が一番承知していた。

藩主実高の信頼厚い正睦は、藩の財政改革に着手していた。

豊後関前藩には隠された借財のほか、大阪の蔵元に銀二千六百貫（およそ四万二千両）の借財をはじめとして、藩の実高の三年分にあたる借金があった。

この借財の返済計画として、正睦は藩内の物産、干し海鼠、干鮑、干鰯（肥料）、判紙、椎茸などを藩の物産所に独占的に買い上げて、借上げ弁才船で上方や江戸に運び込むという、新たな流通機構を考えていた。それが軌道に乗らんとしたときに磐音たち三人が江戸から呼び戻されたのだった。むろん正睦は磐音たちの若い力を藩改革の新しい活力にしようと考えていたのだ。

この藩財政改革は、城下の御用商人やそれと結託してきた守旧派の重役立ちには既得権を侵害されることであった。

猛然たる反発と反対があった。

正睦の策、藩物産所買い上げが本格的に実施されれば、これまで甘い汁を吸ってきた旨味は消えてしまうのだ。

「仁助、そなたの考えを聞きたい。白石様が中居様に書き送られた書状の内容と噂は関わりがあると思うか」

「足が早いだけのあっしにはなんとも申せません。ですが、あっしの勘をお尋ねなら、はいと答えるしかございません」

「相分かった」

磐音はそう答えながら、どうしても御直目付の中居半蔵にあわねばなるまいと考えていた。

「坂崎様、今ひとつ、お気を煩わせることがございます」

「なにかな。遠慮はいらぬ、申してくれ」

「はい、小林琴平様のご家族のことにございます」

磐音の頭裏に、一年前に祝言を上げるはずであった直の顔が浮かんだ。

直は舞の妹で、磐音、慎之輔、琴平の三人は琴平の妹たちを通してさらに密なる縁を持とうしていたのだ。

「小林家の当主、元納戸頭の助成様が病にて再び倒れられたそうにございます」

「なんと不運ばかりが重なることよ」

助成が中気で倒れたため、勤番を終えた琴平が継ぐことになっていた。それが刃傷事件の煽りで小林家も河出家も廃絶、今また坂崎の家が蟄居閉門となれば、改革派の中心的な人物の家は根こそぎ消えていくことになる。

「奈緒様は暮らしを助けるために着物の仕立てをなされておられましたが、それでは立ちゆかず、どこぞの店勤めをされるとか、そのような噂が流れております」

分かったとだけ磐音は答えた。

江戸も国許も磐音の助けを求めていた。だが、今の磐音にはどうにも手の打ちようがなかった。

考え込む磐音に野衣が言った。

「奈緒様はお可哀想にございます。差し出がましいとは思いますが、坂崎様、助の手を差し伸べてあげることはできませぬか」

「野衣どの、今はなんともいたしようがない。奈緒どのが一人頑張り抜くしかないのだ」

そう言った磐音は、野衣に頼みがあると言った。

「今手紙を書く。この手紙を御直目付の中居半蔵様に密かに届けてくれぬか。それがし、中居どのにも疑念を抱いておる。そなたが届けたことが分かれば、もしやの場合、そなたにも危害が及ぶやも知れぬ。たれが渡したかわからぬように届けてもらいたい」

中居半蔵は江戸の宍戸派の集まりにも顔を見せていた。

そのことが磐音の頭をよぎったのだ。

「分かりましてございます」

磐音は茶店から硯と筆を借り受けて手紙を認めた。

この手紙が吉と出るか凶とでるか、賭けであった。だが、もはや猶予はなかった。

二人を待たせて、磐音は細心の注意を払って一通の手紙を掻き上げた。

「頼む」

野衣は黙って頷くと受け取った。

「仁助、いつまで江戸に滞在しておる」

国許に手紙を託したくて訊いた。

「お殿様の行列が江戸に入るまでは藩邸にいよと命にございます。当分は長屋住まいにございます」

と答えた仁助が顔を改めて、

「坂崎様、あっしは政治についちゃあ、何もわかりません。ですが、ご家老の宍戸様一派の横車や専横に泣かされてきた家臣方をたくさん見ておりました。何ぞ力になることがあったら、命じてくだせえ。

と言った。

「仁助、なんとも嬉しい言葉だ。きっとそなたの力が豊後関前藩六万石のためになるときが来る。そのときは頼む」

磐音は仁助に頭を下げた。すると仁助が慌てて手を振り、

「坂崎様、頭を上げてくだせえ」

と言った。

四

坂崎磐音が櫓下の金貸しの権造一家に戻ったとき、騒ぎが起こっていた。

品川柳次郎も竹村武左衛門も磐音の姿にほっとした顔を見せた。

「どうしたな」

喧嘩仕度の五郎造に訊いた。

「顎の野郎が思いのほか素早く動きやがった。深甚流の飯岡一郎助と仲間を引き連れて不動堂に乗り込み、今日は夜から賭場を開く用意をしてやがる。客も夕刻には集まるという話だ。こんな虚仮にされた話はねえぜ。親分は、なんとしても賭場は開かせねえと怒っていなさる」

「北町奉行所の臨時廻り同心どのはどうか」

「月形彦九郎なら、夕暮には顔を出すという噂だぜ」

「ならば親分に言ってくれぬか。まだ日も高い、騒ぎを起こすと町の衆に迷惑がかかる。掛け合いは日が落ちてからにしようとな」

「おめえさんはどうしなさる」

「北町のあんなが厄介だな、工夫がいる。夕刻までには戻ってくる」

「大丈夫だろうな、戻ってくるな」

五郎造が念を押した。

「品川さんと竹村さんもおられる。相手も昼間からは動くまい」

磐音は柳次郎らに後を頼んで、再び櫓下から永代橋を渡って江戸の町に戻って行った。

磐音が訪ねた先は数寄屋橋の南町奉行所だ。まだ表門を大きく開いた門前で門番に、

「年番方与力笹塚孫一様に会いしたい」

と頼んだ。相手は磐音の風体をじろじろと眺め、訊いた。

「約定でもあってのことか」

「いえ、そうではござらぬ」

「ならば無理じゃ、笹塚様は御用繁多な方だからな」

とけんもほろろに断られた。

「いや、門番どの、それがし、笹塚様と昵懇の間柄にござる。取り次いでいただければ必ず会うと言われるはず」

門前で押し問答していると、槍持ち、草履取り、小者らを従えた陣笠の小男が門前を潜ろうとして、

「おおっ、坂崎さんではないか」

と声をかけてきた。

振り返るまでもなく、南町奉行所の切れ者与力の笹塚孫一だ。

「これはちょうどよいところに」

「また厄介ごとを持ち込んできおったか」

笹塚は五尺そこそこ小さな体が、頭は大きい。その頭に載せた陣笠を脱ぐと、傍らの小者に渡した。そして、磐音の耳元に顔を寄せると、

「南町に得のある話であろうな」

と囁いた。

笹塚は勘定方に関わる事件を未然に防いで、悪人が溜め込んだ金を公に没収せず、奉行所の探索費用の足しに繰り入れるという荒業を平然と繰り返す剛の者であった。形は小さいが度胸が据わったところは、町方与力にしておくにはもったいないほどだ。

「さてそれは」

笹塚は供のものに解散を命じると、門番に、

「茶を二つ堀端に」

と命じた。

数寄屋橋際には、公事訴訟の願いを持って奉行所門前に並ぶ人のために、堀端に縁台が並べられてあった。だが、もはや刻限も刻限、公事の列はなかった。

二人は堀を見ながら縁台に腰を下ろした。

磐音は深川不動の夏祭りをめぐるいざこざを話した。

「そなたもいろいろと職を見つけて参るな。そのようなことより六百三十石の跡継ぎに戻ったほうがよいぞ」

笹塚は磐音の境遇を知っていた。

「そちらのほうも厄介が起こっていまして、国許の父が、守旧派の旗頭の国家老どのに蟄居閉門を命じられたそうにございます」

「なんと、あちらもちこらも騒ぎだらけか」

そういった笹塚は大頭の汗を手拭いで拭った。

そこへ門番が盆に茶碗を二つ載せて運んできた。

「これは造作をかけ申す」

磐音は如才なく門番に礼を言った。

笹塚の好みに合わせた茶は熱かった。

茶を啜った笹塚は門番がいなくなったのを確かめ、

「北町の月形彦九郎は悪評紛々の同心でな、あちらでも扱いに困っておる」

「そんな同心になぜ十手を預け続けておられるのです」

「亀の甲羅ほどに毛の生えた同心というものは、奉行所の裏表から上司の弱みまで握っているものよ」

と説明したささづかはしばらく沈思した。

「月形彦九朗には十九になる息子がおってな、すでに見習いに出ておる。つまり隠居しようと思えばいつでも隠居できる身だ」

「なんぞ醜聞を作って隠居させるように仕向けろうと言われるので」

「それではまどろっこしい。あの世に送ったほうがこの世のためだ」

笹塚は大胆なことを平然と口にした。

「それがしにそれをやれと」

「用心棒がそなたの仕事ではないか」

「とは申されますが、金貸しの権造への借りは、子供が拐かされたとき、相手の隠れ家を探してもろうただけにございます」

「もう十分働いたと申すか」

「いえ、そうは申しません。北町奉行所同心を怪我させてはこちらの首が危のうございます」

「そなた、そのことをわしに相談に来たのであろう。そちらのほうは北町にな、跡目相続を条件に話をつけておいてやる」

町奉行所の与力、同心は一代限りが習わしだ。が、よほどのことがない限り、息子や娘に養子を取って世襲された。

笹塚は困り者の臨時廻り同心月形彦九朗を、北町奉行所に暗黙の了解を取って、始末させようと言っていた。

「深甚流の飯岡一郎助はどうしますか」

「やくざの用心棒をやるような男だ。叩けば埃も出よう。そなたが汗を書いた頃合いにわしが出張る」

と南町の年番方与力は請け合った。そしてふと思い出したように、

「月形彦九朗は田宮流居合いの遣い手だ。決して油断するな」

と言い添えた。

櫓下お金貸しの権造一家に再び戻ったとき、戸口には篝火が焚かれ、品川柳次郎や竹村武左衛門、それに五郎造たちが喧嘩仕度も整え、殺気立って集まっていた。

「ようやく戻ってきたな。不動堂に顎一家が勢揃いしてるんだよ。おめえさんが戻ってきたら、殴りこみをかけると、親分が息巻いていなさるんだ」

「刻限がまだ早いな。それに腹も空いておる」

そう言うと磐音は台所に行った。

台所も、おかつら勝手女中たちが出入りの仕度に余念がなかった。

板の間には薦被りが鎮座して酒の香りをそこはかとなく漂わせていた。だが、まだ蓋は開けられていなかった。それに握り飯が平台に並び、漬物が丼に盛られていた。

「おかつさん、握り飯を馳走になるが、よいか」

「好きなだけ食べなせえ。今、味噌汁を注いでやるでな」

磐音は昼前から何度も大川を往復して、腹を空かせていた。そのせいで塩握りがなんとも美味しかった。

「おかつさん、これはうまい」

「越後のコメダ、うまかろう」

「どうりでな、美味しいはずだ」

こうなると磐音はだれが声をかけても上の空だ。

奥の居間から権造親分が出て来たが、おかつに、

「親分、浪人さんに話がしたいのなら、満腹になるまで待つんだね」

と止められた。

「おい、何ぞ思案があって言ってるんだろうな。こっちは生きるか死ぬかの瀬戸際に追い込まれてるんでえ。なにしろ、相手は助っ人が多い上に北町までついてるんだからな」

「親分、ここは我慢の為所だ。ところで、顎の親分が今晩から賭場を開くというのは確かでござるか」

「ああ、俺の弟分のところまで案内が行ってらあ。確かなことだぜ」

「客も大勢集まるので」

「いや、急なことだ。素人衆の旦那方はそう多くは集まるめえ。だがな、顎の身内や兄弟分が集まって祝儀相場になるにちげえねえ。掛け金だって七、八百両は動こうぜ」

「それならば、孫一どのも満足なされような」

磐音が呟き、権造が、

「どういうことでえ」

と訊いた。

「いや、こっちのことだ。それより親分、歩き疲れた。しばらく横にならせてもらいたい」

そういった磐音は板の間に肘枕でごろりと寝転がった。

権造は怒鳴りかけたが、磐音が頼りだから言うなりに待つしかない。

磐音が目を覚ましたのは４つ前のことだ。眠気覚ましに水を一杯飲み干し、親分の居間に行った。

権造親分は黙りこくって煙管を手で弄んでいた。

「ようやく起きやがったか。出入りは勢いだぜ。おめえさんのせいで打ちは雨の祭りだ。すっかりしぼんじまったじゃねえか」

「なあに細工はしてある。さて、親分、でかけようか」

「まさか、また二人ってことはあるめえな」

「それがしだけでは心許さないか。ならば、品川さんと竹村さんと五郎造どのの五人ではどうかな」

「相手は飯岡一郎助ら浪人者と子分ども三十人は優に超えてるぜ。うちはたった五人か」

「ああ、それでよい。それから五郎造どの、尻端折りに襷鉢巻はいかんぞ。浴衣の裾はおろしてくれまいか」

「おいおい、長脇差も置いていけというんじゃあるめえな」

「それでは腰が寂しかろう」

訝しい顔をした権造親分に五郎造、柳次郎に武左衛門、それに磐音の五人は櫓下から永代寺寺領にある深川不動に向かった。

不動堂は寺社と町方の管轄が入り組む一帯で、それが賭場を開く名目になってきたところだ。つまりは寺社も町方も成り行き次第でお目こぼしをしてくれたのだ。

北町奉行所の老練な臨時廻り同心をのさばらせる理由でもあった。

不動堂では赤々と松明と篝火が焚かれ、喧嘩仕度の子分たちが境内のあちこちに屯していた。本堂からは賭場の、

「丁方、揃いました」

とか、

「勝負！」

という熱気をはらんだ声が響いてきた。

「出入りだっ！」

「ようやく来やがったぜ！」

騒ぎに、本堂から浪人たちが飛び出してきた。

十二、三人の真ん中に、巨漢の道場主飯岡一郎助と顎の勝八がいた。

本堂の階段上に懐手をした初老の同心がぽつねんと立っていた。

北町奉行所の臨時廻り同心が少ねえが、子分どもは尻込みしたか」

顎が言い放った。

「大勢だと町の衆に迷惑がかかるでな、親分に願って五人で来た。話し合いならば十分であろう」

「またてめえか。この前のようにはいかねえぜ。うちには飯岡一郎助先生とお仲間が控えておられるのだ。」

飯岡一郎助は派手な夏羽織を方に羽織り、その下には革帯の襷をかけていた。

「深甚流の遣い手だそうだが、大勢でぶつかり合うのはお不動様に申し訳ない。どうです。飯岡どの、それがしとそなたで決着をつけるというのは」

「若造、ぬかしおったな」

飯岡一郎助は左右の仲間に目配せすると、羽織を肩から払い落とし、切っ先の反りが強い豪剣を片手八双に立てた。さらに脇差しを左手で抜くと横に突き出すように広げた。

深甚流得意の二刀流だ。

磐音は包平二尺七寸を静かに抜いた。

権造と五郎造が下がり、柳次郎と武左衛門が刀の柄に手をかけて身構えた。

「品川さん、竹村さん、一対一の勝負です。ほかの仲間が手を出さない限り、こちらも手出しは無用です」

「承知した」

柳次郎らが後詰のいちまで下がった。

磐音は飯岡の両手の剣を見ながら、正眼にとった。すると長閑な雰囲気が不動堂に漂った。

磐音と飯岡の間合いは一間。

磐音が中止していたのは飯岡の左右の二人だ。

二人は未だ刀の柄にも手をかけていなかったが、その面貌には殺気が滲み出て、双眸が血走っていた。

磐音も必死にならざるをえない。

「おおっ！」

右手の着流しの浪人が剣を抜きながら磐音に走り寄って。同時に左手の羊羹色の袴も動いた。

二人は阿吽の呼吸で左右から挟撃するように突っ込んできた。

のどかだった不動堂に緊迫が走った。

そして磐音が様相を一変させた。

磐音が正眼のけんの大切先を水平に寝かせるようにして正面に突っ込んでいた。

飯岡が予想もしなかった行動である。だが、さすがに歴戦の古兵、右手に立てた大刀で払い落としそうとした。

が、磐音の動きは俊敏を極めていた。水平に寝かせた大切先飯岡一郎助の喉頸に二段三段に素早く伸びた。

飯岡は果敢な攻撃を避け切れなかった。

「しゃっ」

「ふうっ」

飯岡の喉を切り裂く音と同時に、息が洩れる音が響いた。

磐音は振りまかれる血飛沫を避けなかった。

一瞬立ち竦む飯岡の胸を肩で突き飛ばすと、前方に走った。そこに門弟たちがいたが、思わぬ展開に飛び下がった。

磐音の顔から胸には飯岡一郎助の血飛沫がはねて、朱に染めていた。それがいつもの長閑な坂崎磐音の顔とは違う印象を与えた。

「くそっ！」

着流し浪人は叫ぶと剣を地擦りに下げ、背を丸めて磐音の懐に飛び込んできた。

磐音は再び正眼に戻していたが、下段から伸び上がってくる剣を絡めとるように擦り合わせて弾き返し、柔らかく手首を返して、相手の下半身に包平を送り込んだ。

「ぐえっ！」

二人目が崩れ落ちた。

磐音も飛び下がり、三人目の羊羹色の袴の浪人に、

「もはやこれ以上の争いは無益にござろう」

と言いかけた。

そのとき、顎の勝八が、

「おめえさん方、黙って立ってないで押し包んで殺してくんな。そのために日頃から銭を積んできたんだ」

と喚き、子分たちにも、

「野郎ども、やっちまえ！」

と言うや、長脇差を抜いた。

品川柳次郎と竹村武左衛門も剣を抜いた。

磐音が乱戦を覚悟した時、待っていた声が響いた。

「御用だ！南町奉行所のお手入れである。不動堂で争うなど不届き千万、おとなしく縛につけえ」

南町奉行所の年番方与力笹塚孫一に率いられた捕り方が、御用提灯を先頭に不動堂に飛び込んできた。

いつの間にか月形彦九朗の姿が階段の上から消えていた。

「親分、ここはいったｎ、裏口から逃げて櫓下に戻るんだ」

磐音の命に四人が暗闇にまぎれて裏口へ逃げ出した。それにつられるように、深甚流の門弟たちも我先にと闇に紛れ込んだ。

逃げ遅れたのは賭場を開帳していた顎一家の連中と客たちだ。

次々に捕り方たちに縄をかけられていく。

磐音は境内から賭場の開かれていた本堂に走りこんでいた。ここで博奕場の客達が右往左往していた。

「博奕はご禁制である賭金も寺銭もそのままにしてひったてえ！」

凛然とした笹塚孫一の命が響き渡り、賭場から顎一家の連中や遊客たちが連れだされていった。するとそこに笹塚と磐音だけが残された。

「権造は、今日の上がりは七、八百両とみていましたが」

「勘定すればわかることだ」

「笹塚様、夏祭りを仕切るのは、これまでどおり金貸しの権造一家でようございますね」

「それでそなたの気が済むならばな」

笹塚が小さな体で胸を張った。

「金勘定は笹塚様にお任せいたします」

磐音はそう言うと賭場を出た。表口はまだ騒ぎが静まっていない。そこで磐音は裏口から櫓下に戻ろうとした。

不動堂の境内は荒れた墓場に通じていた。

磐音が墓に足を踏み入れた時、待ち受ける影を見た。

北町分魚女臨時廻り同心月形彦九朗だ。

「南町奉行所の大頭に近頃、腕の立つ浪人がついているという噂には聞いていたが、どうやらおまえらしいな」

「坂崎磐音にございます。以後、お見知りおきを」

「おれの稼ぎを南の大頭にさらわれてたまるか」

月形彦九朗は両手をだらりと垂らして、磐音に歩み寄ってきた。

月形の形相には決死の覚悟が覗いていた。

「お相手つかまつる」

磐音は再び包平を抜いた。

「神田三崎町の佐々木道場だってな」

「三年ばかり佐々木先生のご指導を受けましてございます」

「てめえのばかっ丁寧な口振りを聞いていると虫唾が走るぜ」

月形彦九朗はすたすたと間合いを詰めてきた。そして半間で足を止めた。

磐音は正眼に構えた。

春先の縁側で日向ぼっこをする年寄り猫のような、長閑な構えだ。

国許の県の師匠中戸信継が、居眠り剣法とよんだ構えである。

二人はその姿勢で睨み合った。

月明かりだけが墓にこぼれ落ちていた。

時が緩やかに流れていく。

雲間につきが隠れて墓を闇に戻した。

ゆるゆると月光がもどってこようとしていた。

月形彦九朗が無言の気合とともに柄に手を走らせた。流れるような動きで剣を抜きあげて、磐音の胴に送り込んだ。

一撃必殺の抜き打ちだ。

後の先。

磐音も動いていた。

月形が柄に手を差し伸べるのを見ながら、果敢に踏み込んだ。

正眼の県賀音もなく月形彦九朗の喉に走っていた。

どうの抜き打ちと喉への斬撃。

磐音が思い込みよく踏み込んだ分、寸余のさで刎ね勝った。

一瞬の差が生死を分けた。

月形彦九朗が腰から崩れるように落ちた。

磐音が血振りをくれた時、人の気配がした。

笹塚村一だ。

「そなたの剣はますます凄みを増すな」

「難敵でした。怪我だけでは収まりませんでした」

「分かっておる。これで北町にはほっとする与力同心がいるぜ」

と言った笹塚は、

「人に見られぬうちに消えよ。後始末は今晩の返礼、それがしがいたす」

と命じた。

賭場には予想以上の金が残されていたものとみえる。

磐音が黙って頭を下げると、笹塚が紙包みを磐音に投げた。

片手取りに掴むと硬い者が手に触れた。

「いつもただ働きでは相済まぬでな」

今一度、頭を下げた磐音は、墓から櫓下へと闇を伝って走った。